



2016 ~ 2017  
国際ロータリー第2550地区  
第 1 グループ  
INTERCITY MEETING



2017年2月12日  
りんどう湖ロイヤルホテル  
ホスト: 黒磯ロータリークラブ



# RI 第2550地区 第1グループ 2016-2017年度IMプログラム



## 1. 受付・登録開始 午後2時00分

司 会 鈴木隆子

## 2. 開 会 午後2時30分

・ 点鐘	第1グループガバナー補佐	高 木 慶 一
・ 国歌・ロータリーソング斉唱	ソングリーダー	高 木 茂
・ 開会の挨拶	IM実行委員会委員長	鳥 居 輝 一
・ 歓迎の言葉	黒磯RC会長	村 山 茂
・ 来賓・クラブ紹介	第1グループガバナー補佐	高 木 慶 一
・ ガバナ補佐挨拶	第1グループガバナー補佐	高 木 慶 一
・ 来賓祝辞	RI第2550地区ガバナー	栃 木 秀 磨
	那須塩原市 市長	君 島 寛
	那須町 町長	高 久 勝

## 3. クラブ報告 午後3時00分

- ・ 各クラブ会長

## 4. ロータリー財団100周年を祝おう 午後3時35分

- ・ ビデオ放映

## 5. ロータリー財団学友記念講演 午後3時50分

- ・ 講師 ロータリー財団学友会会長 伊東 崇 様

## 6. ロータリー財団の歴史を知ろう 午後4時10分

- ・ ナレーターとちぎテレビ報道部アナウンサー 田崎好美 様

7. お礼の言葉 午後4時50分

- ・ 次期ガバナー補佐紹介 第1グループガバナー補佐 高 木 慶 一
- ・ 次期ガバナー補佐挨拶 第1グループ次期ガバナー補佐 佐 藤 正 一
- ・ 次期IM開催クラブ挨拶 西那須野RC次期会長 小 出 文 雄

8. 閉会 午後5時10分

- ・ 閉会の挨拶 IM実行委員会副委員長 稲 垣 政 一
- ・ 点鐘 第1グループガバナー補佐 高 木 慶 一



9. 懇親会 午後5時30分

司 会 吉光寺 政雄

- ・ 開会の挨拶 第1グループガバナー補佐 高 木 慶 一
- ・ 乾杯 第1グループ次期ガバナー補佐 佐 藤 正 一
- ・ 祝宴
- ・ アトラクション 片野篤 様 鈴木ゆかり様
- ・ 閉会の挨拶 IM実行委員総務委員長 荒 井 昌 一

10. ソング 午後 7 時 0 0 分 「手に手つないで」



- 司会 鈴木隆子



本日は、大勢の皆様にご参加いただき、誠にありがとうございます。会員94名、来賓5名の99名の参加を頂きました。

この度のIM(インターシティ・ミーティング)は、高木慶一ガバナー補佐のご指導のもと「ロータリー財団」が今年で100周年を迎えるにあたり「ロータリー財団100周年を祝おう」をメインテーマに、皆様と共に財団の歴史や財団の奉仕活動などを勉強し、再認識をして頂ければと思っております。

また懇親会は第1グループが一堂に介する機会でもありますので、これを機に皆様方の交流がはかられれば幸いです。

今回の開催にあたりましては、黒磯ロータリークラブがホストとなり準備を進めてまいりましたが、何かと行き届きの点もあろうかと存じますが、ロータリーの友情に免じて頂ければ幸いです。

それでは、只今より2016-2017年度国際ロータリー第2550地区第1グループIM(インターシティ・ミーティング)を開催いたします。

-  開会

- 点鐘  
高木慶一 第1グループガバナー補佐



- 歓迎の言葉  
村山 茂 黒磯ロータリークラブ会長



- 国家・ロータリーソング斉唱  
高木 茂 ソングリーダー



本日は国際ロータリー第2550地区第1グループのインターシティミーティングに多くの皆様方にご参加いただきましたことに対して心より感謝申し上げます。また、栃木秀磨ガバナー、地元那須町の高久町長様、そして那須塩原市の君島市長様、後ほど講演いただきますロータリー財団学友会会長伊東崇様には公私ともご多用の中また、足元がお悪い中ご臨席賜り、厚くお礼申し上げる次第です。

- 開会挨拶  
鳥居輝一 IM実行委員会委員長



さて、2016～17年度国際ロータリー ジョン・ジャーム会長は、「人類に奉仕するロータリー」をテーマに掲げられました。その中で、「ポリオ撲滅から私たちが学んだ多くのことの中で、最も大切なことながら最もシンプルなこと、それは、ロータリー全体の発展を望むなら全員が同じ方向に進まなければならないということです。クラブ、地区、RIのレベルにおけるリーダーシップの継続は、ロータリーを繁栄させ、その秘めたる可能性を最大限にする唯一の方法です。新会員の入会や新クラブの結成だけでは充分ではありません。私たちが目指すのは、単にロータリアンの数を増やすことではなく、ロータリーによる善き活動をより多く実現させ、

将来にロータリーのリーダーとなれるロータリアンを増やすことです。」とおっしゃられています。

そして、本日もご臨席いただいております第2550地区栃木秀麿ガバナーは、「元気なクラブ作りと誠実な職業奉仕」をテーマに掲げられました。その中で、「親睦というのは、ロータリー思想が形成し、奉仕の心を作り出すための諸活動のことを指すのです。例会出席はそのひとつであり不可欠です。また、奉仕の実践の場である職業奉仕は、職業サービスを念頭に相手の立場に立った職業活動を行い、相手の喜びを自分の喜びとしながら、職業人としてのより高い倫理の向上に努め、世の中に広めていくことです。」とおっしゃられました。

本年度はこれらの指針に基づき活動してきた中で、本日のインターシティミーティングを迎えた訳でございます。第1グループの全員が同じ方向を向き団結するとともに、奉仕の心を作り出すための親睦をさらに深めていただきたいと考えております。

また、今月はロータリー財団創立100周年に当たります。従いまして、今回はそのことをテーマにプログラムが構成されております。後ほど高木慶一ガバナー補佐からご案内がございますので、私からは以上とさせていただきます。

結びに、第1グループ各クラブの益々のご活躍と本日も参集の皆様のご多幸ご健勝を心よりご祈念申し上げます。歓迎の言葉といたします。本日は、誠に有難うございます。

## ● 来賓紹介・クラブ紹介

### 高木慶一 第1グループガバナー補佐



## ● ガバナー補佐挨拶

### 高木慶一 第1グループガバナー補佐



立春を過ぎ暦の上では春ですが春とは名ばかりでまだまだ寒い日が続いております。

皆さまにはご多用のところ、第1グループのIMにご参加を頂き心より感謝申し上げます。

本日は2016-17年度の上半期を振り返って1ヶ月が過ぎました。各クラブの本年度の事業経過報告を頂きます。また昨年3月に規定審議会が3年ぶりに開かれました。重要な部分が改定されました。例会が週1回から月2回開催が認められました。クラブ細則の変更などあれば報告頂き、それを第1グループおのおののクラブの理解を深めて頂きたいと思っております。

RI 6人目の会長アーチ・クランプ氏により1917年創立したロータリー財団は、今年創立100周年を迎えました。第1グループのクラブでは地区補助金を使った色々な事業に取り組んでおられます。また補助金を使って海外のクラブと共同で事業を推進しているクラブもございます。今日のIMのテーマを「財団100周年を祝おう」と致しました。財団の補助金による各クラブが事業をしています。皆さんにお配りした、新聞のコピーは西那須野ロータリークラブの100周年事業です、角橋会長から報告があると思います。また財団学友会々長の伊東崇様からご講演を頂き財団奨学生及び財団奨学金に理解を深めて頂きたいと思っております。またとちぎテレビ「おはようとちぎの朝」でお馴染みの田崎好美アナウンサーのアナウンスでロータリー財団の100年の歴史を勉強したいと思っています。ガバナーエレクト太城年度は地区財団委員長に大田原中央の森本敬三様が就任いたします。第1グループとして皆さまのご協力をよろしくお願い申し上げます。

7クラブの会員が一同に会して親睦を深める機会はこのIMが唯一の機会でございます。懇親会で楽しい時間を共有して親睦の実を上げて頂きたいと思っております。素敵なアトラクションを準備していますので、楽しんで頂きたいと思っております。

本日のIMが実りあるIMになりますようご協力をお願い申し上げご挨拶とさせていただきます。

## ● 来賓祝辞

### ■ 栃木秀麿 RI第2550地区ガバナー



IMは近隣都市の数クラブが集まって開かれるロータリーの会合です。クラブ会員全員参加のこ

の会合の目的は会員相互の親睦と知識を広めることと、さらに会員にロータリー情報を伝え奉仕の理念を勉強するために開催されます。

ポール・ハリスはIMの効果について次のように述べております。「各都市の代表的実業家が集まることにより、日常の痛烈な競争意識が緩和され、互いに助け合いの精神が育まれます。彼は競争都市であるサンフランシスコとロサンゼルス市のIMに出席する機会があり、この競争の激しかった両市の代表者間にみられた友愛の情景には深く感激しております。」その後、両クラブの会員はこの友愛の場を求めて往復し合っていました。

また、ロータリーの拡大は1912年カナダ、イギリス、1913年アイルランドと続きました。北アイルランドのヴェルフファストと東アイルランドダブリンのロータリークラブは南北アイルランドの不仲の時代にも、しばしば共同の会合を催していたと言われております。このようにロータリーは相反する利害関係を如何に調整融合させるべきか、いつも考えてきました。

本日のIMは地域のロータリアンを一同に集めて、友愛の雰囲気を作り、成果を期待するものであります。ロータリーソングの「手に手つないで」は会員の結束を期待しております。そして、奉仕の理想の基に結び交わした世界的な人の輪は国際理解、親善、そして世界平和へと繋がります。

■ 君島 寛 那須塩原市市長  
代理 片桐計幸 那須塩原市副市長



皆さん今日は、わたくし那須塩原市副市長の片桐と申します。本来、市長が来てご挨拶申し上げるところでございますが都合により出席できませんので、私からご挨拶申し上げます。

本日は国際ロータリー第2550地区第1グループインターシティミーティングにお招き頂きまして誠に有難うございます。

貴クラブにおかれましては日頃から崇高な奉仕の精神のもと、様々な活動を積み重ね地域社会の発展に多大なる貢献を頂いておりますこと深く感謝申し上げます。これもひとえに会員の皆様の高い志と熱意の賜物とあらためて敬意を表する次第でございます。

また国際ロータリー財団の100周年にあたりまして心からお祝い申し上げます。ポリオ撲滅や基本的教育の推進、地域社会の発展のための活動な

どに取り組まれた国際ロータリー財団は長きに渡り、国際社会において大変重要な役割を果たしてこられました。この100周年を契機に、また新しい歴史が始まるわけでございますが本日お集りの皆様一人お一人の熱意と国際的なチームワークにより、国際ロータリー財団が更に発展されますことをお祈り申し上げます。

那須塩原市におきましては、今年、第2次那須塩原市総合計画がスタート致します。市の羅針盤といふべき、この計画におきまして将来像を「人がつながり新しい力が湧きあがるまち那須塩原」と致しました。その実現に向け国、県、関係機関と連携しながら各種施策に取り組んでまいりますので引き続きご協力をお願い致します。

結びに国際ロータリー第2550地区第1グループの益々の発展と会員の皆様のご健勝ご活躍を心からご祈念申し上げ、お祝いの言葉と致します。本日は誠に有難うございます。

■ 高久 勝 那須町町長  
代理 山田正美 那須町副町長



わたくし那須町副町長の山田と申します。本来ですと町長が来て挨拶申し上げるところですが大変に恐縮ですが代理で挨拶させていただきます。本日はIMの会場を那須町に設定されたことを改めてお礼申し上げます。また、この集会在盛大に開催されたことをお慶び申し上げます。

皆様は県北の方ですから、那須町には何度もおいでになっていると思いますが、那須町には年間500万人の観光客が訪れます。様々なお客様に那須町にきて良かった。そんな思いで帰って頂けるような町づくりを今進めているところです。しかし、人口が減ったりいろいろな問題で苦労している日々でございます。

町長の代わりでいろいろところで挨拶をする機会がありますが、今日は空気が違います。高い意志と崇高な理念を持った組織や地域のリーダーの皆様の前で緊張しておりますが自分の言葉であいさつをさせていただきます。

国際ロータリーについて詳しくは分かりませんが、200以上の国で地域クラブが34,000~35,000有り、122万ほどの会員がいると記憶しております。2~3年前の数字ですので間違いが有りましたらお詫び申し上げます。このような多くの会員が崇高な理念や高い志を持つての日々活動に心から敬意を

表したいと思います。

国際ロータリー2016～2017のテーマは「人類に奉仕するロータリー」ですが、私達、自治体、公務員、行政マンも採用されると国民の奉仕者として宣誓致します。国家公務員も同じです。私は那須町に採用されましたから、40年近く奉仕というものを念頭に入れ働いてきました。

奉仕に関してロータリーの皆様は、しっかりとしたビジョンを持って、組織のコンセンサスを得て取り組んでおられます。頭が下がる思いです。公務員である私達と国際ロータリーの皆様の活動は、たぶん奉仕という活動で考えますと目指すところは一緒と思っております。奉仕の考えが無ければ町づくりは出来ないと思っております。ロータリーの皆様のご指導ご助言を頂きながら町づくりに努めたいと考えております。

今日はロータリー財団100周年記念ということですが、「世界で良いことをするために」分りやすいテーマで財団の基金が設立され、国際ロータリーと共に100年も続いているということにあらためて敬意を表したいと思います。

結びになりますが今日は那須で有意義な時間を、そして楽しい時間をすごして頂きますようお願い申し上げます。町長に代わって恐縮ですが挨拶とさせていただきます。本日の集会おめでとうございます。



## クラブ報告

### ● 大田原ロータリークラブ 会長 小西久美子 様



1. ロータリー財団、地区補助金による活動  
11月に黒羽地区内で行われているあじさい祭りへの支援として、黒羽城址公園内に150本の紫陽花の木の植樹を行った。  
(公園内には現在6,000本のあじさいがある)  
あじさい祭りは毎年6月下旬から約3週間にわたり開催されるイベントであり、開催期間中だけでも市内外はもとより県内外からも多くの観光客が訪れている。ちなみに平成28年は80,000人からの誘客があった。
2. グラウンドゴルフ例会  
会員が健康でいることが何より大切であることから、誰でも気軽に楽しめるスポーツとして取り入れた。下手な人は下手なりに、上手な人は上手

なりにそれぞれ楽しめた。終了後食事をしながらの成績発表では皆の笑顔が印象的でした。

3. クリスマス家族と一緒にの例会  
毎年恒例になっている家族と一緒にの例会で、音楽やバルーンアートのアトラクションで、大人も子どもたちも楽しめる例会にしている。また、品物を寄付してもらいオークションの売り上げをにこにこボックスに入れ寄付活動の一部にしている。
4. その他  
例会時、年間を通してポリオ撲滅への寄付を募っている。  
会員外の方の卓話を多く取り入れるようにし、沢山の情報を得られるようにしている。

※ 定款・細則に関しては今まで通りとすることに決定した。

### ● 西那須野ロータリークラブ 会長 角橋 徹 様



今までのロータリー財団地区補助金活用事業

- 当クラブでは10年前に親から虐待を受けた児童を保護・養育する、旧喜連川地区の「養徳園」と旧氏家地区にある「養護園」への支援として施設児童100名程を那須動物王国へ招待する奉仕活動をスタートさせた。
  - その後は、春に施設への出前バーベキュー(約130名分)を毎年実施している。
  - 東日本大震災後には、台湾桃園RCからの支援金と併せて、「養徳園」には大学進学児童への支援として200万円、「養護園」にはオープン調理器等の購入支援を実施。
  - 一昨年は、地区補助金を活用して、大学進学者2名への経済支援を実施。
  - 昨年度は、ロータリー財団奨学金による大学進学者2名へ各50万円の経済支援を実施。
- ★ この10年間で、児童養護施設への公的な支援制度も充実し、更にロータリークラブ以外の各種団体からの支援も継続、増加してきている。
- ★ 昨年の例会でNPO法人キッズシェルター代表の外来卓話により、片親家庭の増加と貧困化が進み、一日の食事が学校給食だけとか、教材、部活用品が買えない、遠足や修学旅行

に行けない児童が那須塩原市内にも相当数存在する現状を知る。

- ★生活困窮家庭の児童でも肉体的暴力を振られているケースがあり、表面化し保護されれば養護施設に入所させられるが、潜伏している場合が多い。
- ★生活困窮者でも生活保護を受けられない家庭のこどもや、男性に依存してしまう母親のこどもなど、結局は親の責任問題であるが、親が親としての責任を果たせない現実で、こどもが犠牲になっている現実がある。
- ★市からの認定を受けた児童は公的支援が可能であるが、認定を得られていない児童は公的なセーフティーネットからも漏れて孤立化し、学習能力の低下、登校拒否、いじめ、非行へと陥り、このこどもたちの行き着く先が養護園であったり、少年鑑別所となってしまう。
- ★若い会員から、米山奨学寄付やロータリー財団寄付について海外対象なので、もっと身近な処での奉仕活動に力を入れればとの意見が出ていた。
- ★数年前にRI方針に「人道的支援」が加わり、更に地域でのNPO法人などとの連携による奉仕活動の推奨もされている。

#### 【当年度事業として】

- 当年度のロータリー財団地区補助金活用事業として、当地区において公的認定児童対象の支援活動を展開していた、NPO法人キッズシェルターが、公的認定もセーフティーネットから漏れている児童対象の「こども食堂事業」への支援を決定。
- 補助金申請額は37万程度、クラブ負担11万の負担で、こども食堂の厨房設備と冷蔵庫、炊飯器等の購入を計画し、7月中に実施したが、決定補助金額は15万円程で残り分はクラブ負担として対応。
- 本年度がロータリー財団創立100周年にあたり、RI会長、地区栃木ガバナーより各種記念事業、イベント、例会等の実施要請があり、当該事業を財団100周年記念事業とし位置づけた。
- こども食堂では保健所が関係してしまうため、「食事を伴うこどもの居場所」として7月23日から運営を開始し、クラブ員からも食材、食料製品、文房具、雑貨物などが随時寄付され、また会員が同席しての食事や、遊び、屋外でのバーベキューを実施してきた。
- 準備、開設、運営に関して下野新聞には二度の紹介記事が掲載された。
- 当クラブ12月最終例会を「ロータリー財団100周年記念家族例会」と銘打ち、会員家族を招待し、会員一品持寄りチャリティーバザーを開催する。
- 2017年度1月10日新年例会においてNPO法人

キッズシェルターへ20万円を寄付、RI提唱の公共イメージアップも兼ねて毎日新聞社、下野新聞社へ取材要望しての取材を受け、12日に毎日新聞、13日には下野新聞に記事が掲載された。

- 結果、やはり新聞記事への反響は大きく、「多くの方から記事を読みました、あんなこどもたちがいるのだ？」とか「ロータリークラブであんな活動をしていたの」、人によっては「昔の罪滅ぼしをしているの？」など多くの一般市民からも声を掛けられた。
- 記事により西那須地区の農家の方からは数度の野菜提供を頂き、また直接NPO法人への寄付も寄せられた。
- 関わってしまったからには、継続的支援は必然であると認識している。
- ◎ 私達は国際ロータリー会員だから世界に目を向けることも大切ですが、私達はこの地域で経済活動を行い、社会生活を営んでいるのだから、地元にもっと目を向けましょう。それもまた「人類に奉仕するロータリー」の実践ではないでしょうか。
- ◎ 更に、グローバル補助金事業も2014-2015年度に続き、台湾桃園RCと新事業の申請を行ない、審査結果待ちである。

#### ● 黒羽ロータリークラブ 会長 坂本 瞭 様



皆さん今日は黒羽ロータリークラブの会長を務めております坂本です。宜しくお願ひ致します。

当クラブは本年会員9名で活動しております。したがって事業を行うには、会員全員一丸とならないと、上手くいかないものですから苦勞が絶えません。

事業の報告ですが、7月に新年度計画で直ぐにロータリー財団の補助金を申請しまして、学生のソフトボール大会を開催致しました。また、去年まで12回連続で行っていた少年サッカー大会をスタッフが少なくなり運営が難しく、テニス大会に切り替えました。

続きまして10月に毎年恒例の、アジア学院と黒羽中学校の交流会を開催しました。今年で39回目になります。内容につきましては学校にお任せですが、今年は、きな粉飴作り、弓道、相撲など子供と一緒に楽しみました。また教室では一人230円の



給食を一緒に頂きました。

いかんせん会員が9名でございますので、通常の例会は会員卓話が主になりますが、親睦と奉仕をテーマに活動しております。

4月頃に、西那須野ロータリークラブと塩原ロータリークラブとの三クラブで、合同例会を計画しております。近いうちに幹事の方から連絡しますので宜しくお願いします。

以上でございます。有難うございました。

### ● 那須ロータリークラブ 会長 國分仁臣 様



那須ロータリークラブの現在の会員数は、正会員8名、名誉会員1名です。

今年度、活動するにあたり会員数の減少傾向を鑑みて、新入会員の入会をしやすくするとともに、現会員の負担も少なくしたいと考え、次の事項を決定いたしました。

1. 年会費を14万円とする。
2. 例会の回数を30回とする。

本年度に事業は、継続事業として

1. 那須街道沿いの県有地(600坪)の下草刈りと一軒茶屋の花壇整備。
2. 子狐太鼓の育成をサポートする目的で金銭(5万円)の支援と九尾祭りのイベントに子狐太鼓の子供達と協力して”お団子”を販売し、親睦を図りその売上金を支援に充てました。

那須ロータリークラブは、小所帯だからこそ味わえる楽しい例会を行い、親睦(小旅行、クリスマスパーティー、夜例会での食事会)を深め、奉仕の心を育んでいきたいと思っております。

### ● 塩原ロータリークラブ 会長 菊池 悟 様



塩原RCに入会し会長をするのは3回目になります。現在は会員9名という少数精鋭のメンバーにて活動しております。

奉仕事業としてH14年から続けている“ふれあいの森(障害者支援施設)”への支援活動を行っております。

- 12月にクリスマスパーティーへ参加し、会長がサンタクロースになりきりプレゼントを渡しました。恒例行事となっておりますので、通所者たちは毎年とても楽しみにしてくれております。今年も大盛況でした。
- パーベキュー大会  
通所者だけではなく、職員の皆さんも交えて楽しく食事をしました。

また、今年度は会員の菜の花畑にご招待し、食事をしながら、きれいな花々を見て心豊かな時間を過ごしていただきたいと計画しております。この事業につきましては、塩原RCに初めて地区補助金をいただき実施したい考えです。少ない会員ですのではなかなか大変な部分もありますが、出来ることからやっというて頑張っております。

クラブ行事といたしましては、那須RC、大田原中央RCとの合同例会・親睦会ゴルフにて交流を深めております。また会員間士の親睦会として、例年日本プロゴルフトーナメントコースでのプレーを楽しんでおります。

### ● 大田原中央ロータリークラブ 会長 森本敬三 様



大田原中央ロータリークラブ2016-17年度会長を仰せつかっている森本でございます。

上期が終了し、下期に入ったところ迄の報告をさせていただきます。

当クラブでは、今年度1年交換学生を台湾より受け入れ現在、2番目のホストファミリーのお宅から大田原女子高等学校に通学しています。大変、素直で明るい子です。日本語は聞いて理解できるようですが、話す方は未だ流暢には話せないようです。学校では部活動としてバスケットボール部に加入しています。大田原での生活が彼女にとり生涯の宝物として有意義であることを期待します。

また、8月には大田原市「与一まつり」が例年の如く開催され、13回目を迎える「ポリオ撲滅キャンペーン」を実施しました。大田原ロータリークラブ、西那須野ロータリークラブ、黒羽ロータリークラブの皆様のご協力に感謝申し上げます。

年が明け、平成29年1月にはザゼン草(大田原市天然記念物)群生地清掃活動を金丸地区保存会の方々と行い、開花の準備に備えました。

2月に入りますとロータリー財団の「平和と紛争予防、紛争解決」月間ですので、宇都宮にある陸上自衛隊への職場訪問となります。

以上が上期から下期にかけてのクラブ活動報告です。

## ● 黒磯ロータリークラブ 会長 村山 茂 様



それでは黒磯クラブの活動報告をさせていただきます。現在の会員数は38名で内女性は2名でございます。今年度の会員増強目標は、純増2名といたしておりますが、まだ達成できておりません。残された時間は少なくなっておりませんが、何とか達成したいと思っております。

関連して、2016年2月にはRI規定審議会が開催され、多くの制定案が採択されました。中でも、例会開催や入会に関する規定の改定はクラブの裁量を拡大し、柔軟な対応が可能となりました。当面、黒磯クラブとしては、従来通り変更しないことといたしましたが、今後については、引き続き検討することも併せて確認いたしております。

また、黒磯クラブでは2016年から17年の2年間にわたり、米山記念奨学生 蘇呈歓君(マレーシア)宇都宮大学を受け入れております。本日も会場にきておりますのでご紹介いたします。

さて、具体的な活動でございますが、

8月20日 第20回インターアクト年次大会が、國學院栃木高等学校で開催され、黒磯高等学校IA部員共々参加

8月22日～3日間

第2回那須塩原ミルフィーカップジュニアテニストーナメント大会運営支援並びにカテゴリーごと優勝、準優勝、第3位カップの寄贈:ロータリー財団補助事業(2016-17年度地区資金活用)この大会は、NPO日本スポーツ振興協会と地元那須塩原テニス協会が行うもので、18歳以下のテニス選手を育成することを目的とした大会で、関東一円から約600名が参加いたします。テニスばかりでなく地域振興にも寄与するものと考えております。

9月24日 那須塩原市社会福祉協議会主催による、ふれあい広場に鮎の塩焼きを出店し、障害者との交流を図るとともにその収益金を寄贈いたしました。

10月23日 那須塩原市主催の那須野巻狩まつり開催に協力し、救護・美化班を担当しました。

11月19日 那須塩原市小学校対抗駅伝競走大会開催に協力し、黒磯クラブ寄贈(RI財団補助事業「2015-16年度地区資金活用」優勝、第2位、第3位カップ及びレプリカの授与並びにスターターを務めました。

11月21日 地区大会ゴルフコンペにて黒磯クラブ室井次男君が優勝してしまいました。クラブ初の快挙であります。なお、晩餐会、地区大会では栃木秀麿ガバナーはじめ足利わたらせロータリークラブの皆様には大変お世話になりましたこと、この場をお借りしてお礼申し上げます。

1月11日 1月の月間行事に因んで、職場訪問を行いました。本日の会場でもあります、当りんどろ湖ロイヤルホテル様にて、普段見ることができない「ベッドメイキング」や「厨房」を拝見させていただきました。

なお、2017-18年度に向けて、財団地区資金を活用し、那須塩原市のご協力を得て、タイ国に消防ポンプ自動車を寄贈すべく活動しているところでございます。

以上が上半期の主な活動内容でございます。今後下半期は、インターアクトの台湾研修、足尾の植樹、那珂川水質調査等の実施を予定しております。以上、黒磯クラブの報告といたします。ご清聴ありがとうございました。



ロータリー財団100周年を祝おう  
● ビデオ放映『モンゴルに緑を』



韓国から来たこの男がゴビ砂漠に木を植えるということでもとてもビックリした。春に種を蒔くのは希望を蒔くことなんです。私達が蒔いたのはゴビ砂漠に緑を増やすという希望の種です。

希望の種を蒔く2004年に私が地区ガバナーになった時、韓国の仲間たちは100周年をどうやって祝おうかと、あれやこれやと考えていました。韓国の委員さん達は風で運ばれてくる黄砂の被害を食い止めるため、大掛かりなプロジェクトを選びました。黄砂は中国とモンゴルにまたがる巨大なゴビ砂漠から来るものです。モンゴルから来る、この黄砂を防止しなければならない、この活動を始めたのも、それが主な理由です。



韓国のロータリアンはモンゴルに防風林を作ること考えました。80年前に初のロータリークラブが出来て以来、韓国には約1400のクラブが存在します。プロジェクトを成功させるためモンゴルのロータリアンにも呼びかけました。



モンゴルにロータリーが設立されたのは1996年、広大なこの国の7つのクラブは総て首都ウランバートルに有ります。モンゴル唯一のこの大都市では21世紀の先端技術や新しい建築物と古代モンゴルの伝統が共存しています。地方に住む200万人の

人口は未開の巨大な国土に散在しています。外国人には想像できないでしょう。膨大な土地に一握りの人しか住んでいないのです。当初、防風林プロジェクトにモンゴルのロータリアンは懐疑的でした。2004年末に始まった、このプロジェクトに参加しましたが、最初ゴビ砂漠のど真ん中に木を植えるなんてとんでもないアイデアだと思いました。本当にこのプロジェクトをする気があるのか、資金は本当に有るのか聞かれました。ゴビ砂漠は乾燥していて水を得るのがとても難しいので不可能ではないかと思いました。このプロジェクトを本当に実施できるのか自分たちも半信半疑でした。でもロータリアンなら実現できる。私達ならできます、やるべきです。出来るんだということを証明するんです。韓国とモンゴルのロータリークラブ、そして両国政府が協力しロータリー財団からマッチングプラント補助金が得られました。プロジェクトは「モンゴルに緑を」と名付けられました。もっとも風が強く何の植物も育たないと思われていたゴビ砂漠のど真ん中に行こうと考えました。そこで絶対に無理だと思われている防風林を何としても作って見せようと考えたのです。ここへ来てフェンスを立てたり穴を掘り始めた時は大変でした。



2005年5月南ゴビ付近の防風林を手伝おうと韓国から100人近いロータリアンがやってきました。1.6キロに渡り8万本の木が植えられました。町の近くに防風林を作りました。結果は良好と科学アドバイザーは言います。ここ3、4年の観察では砂の被害が減ったと地元の人達は言っています。ささやかな成功ですが重要な一歩です。ロータリアンと地元の人々にとって私たちが自然と闘い問題を乗り越えられるかを示す良い例です。ロータリアンや政府機関そして、それまで知らなかった人達が、こんなに協力してくれるなんて思いませんでした。夢が現実になるかもしれないと希望が湧いてきました。

プロジェクトは韓国とモンゴルを行き来しながら続けられていきます。2008年ユンさんは韓国の新ガバナーを連れて行きました。一行はウランバートルにある地生態学研究所で嵐の原因について学びました。モンゴルでは年々砂漠化が進んでいます。気候変動に加えて人為的な行為も砂漠化の原因になっています。

動物の群れの急激な増加も要因の一つです。家畜も前より増加しました。1990年2000万頭いた動物は2倍の4000万頭にまで膨れ上がりました。山羊は



この種の動物は草原にとっても有害です。過剰な放牧による環境破壊で砂塵が発生しやすい状況が生じています。これに取り組むため2005年から毎年新しい地域でプロジェクトを始めています。地域を守り砂塵を減らすために植樹が行われモンゴルの人達に新しい技術を教え家畜に頼らない生活が出来るようにしています。

翌日、韓国のロータリアンは拡大し続ける砂漠の北端に赴きました。20年から30年前には、このあたりにも緑が茂り豊かな水を湛えた湖が有りましたが今では全部なくなってしまいました。



新しいエコロジーセンターでは、地域の人々に植樹の方法だけでなく、家畜の替りに野菜を育てる方法も教えています。出来るだけ多くの住民に参加してもらい野菜の栽培や収入を得る方法を教えたいと考えました。木を植えるのが好きで興味が有ったので今年プロジェクトに参加しました。ジャガイモも順調に育っていますよ。

ロシア国境近くは土地が肥沃なため野菜栽培が重要な役割を果たしています。野菜栽培は以前から行われていました。住人はすでに何が必要か分かっていたので向こうから私たちに働きかけてきたんです。防風林と灌漑を必要とする農家の人達のために木を植えました。木を植えれば害虫や強風から野菜を守るので、このプロジェクトはとっても有り難いと思っています。しかし、農家のやり方について、もっと技術的な支援が必要です。これから農家の組合を作っていこうと思います。そうすることがプロジェクトを末永く続けていく礎となるでしょう。「モンゴルに緑を」の支援のもと住民達は植樹や野菜栽培の方法を学んでいます。木を植えて野菜を育て生活を変えることの大切さ、そして土から育ったものが与えてくれる幸せを理解してくれたようです。

今日はモンゴルで最大の祝日ナーダム。このプロジェクトにとっても特別な日です。この日は朝から

カラコロム近くの苗床をロータリアンが訪問しました。順調に育っています。近くの学校に井戸を掘る手伝いをしました。この井戸が有れば学校はここに何千本もの木を植えられます。



一行はやっとナーダムの祭りに加わり、ここである発表を行いました。この植樹プロジェクトを皆さんに引き継ぐことができ大変嬉しく思っています。モンゴルの人々に引き渡された苗床、今後の行方は彼らの肩に係っています。カラコロム人々を代表して、この仕事を引き継ぎこれからも協力していくことを国際ロータリーにお約束します。

2005年以来このプロジェクトで25万本の木が植えられてきました。このプロジェクトはゴビそしてモンゴルいたるところで実施できるものです。基盤整備を整え研修と教育を提供しモンゴルの人々に繁栄の新たな道を示すものです。地元地域にとって大きな支えとなります。植樹や野菜の栽培の噂を聞き付けた人たちが、とても熱心に話しかけてきます。それでもなお莫大な仕事が残されています。活動は始まったばかり、まだ仕事が山積みだということを改めて認識しました。長い年月を要します。5、6年では解決できる問題ではありません。



「モンゴルに緑を」は今日のためにだけでなく未来への約束です。今蒔いているこの小さな種は大海の一滴にすぎないかもしれませんが、でも、何年もすればやがて大きな木となり木蔭で子供たちが遊ぶ日がきっとやってきます。ビジョンと信念と勇気を持って行動すること、それがロータリーです。いつの日か私にも孫ができるでしょう。その時にこの木を見せたいと思います。きっと誇りに思ってくれるでしょう。



## ロータリー財団学友記念講演

- 講師 ロータリー財団学友会  
会長 伊東 崇 様



皆様、こんにちは。ロータリー財団学友会会長を務めております伊藤崇と申します。本日は、この様な場にお招きいただきまして、誠に有難うございます。

最初に私の自己紹介となりますが、事務用の封筒を製造販売しております(株)ムトウユニパックという会社に勤務しております。小学生の頃から趣味でパソコンをいじっているような生活をしておりましたが、現在は社内のSEとしてコンピューターシステムの開発や運用を担当しております。

私とロータリーの出会いは、中学生の頃吹奏楽部に所属しております。ユーホニウムという金管楽器を担当しておりました。中学卒業後も栃木市民吹奏楽団に所属しております。当時、その前楽団長の村上まさこ様という栃木南ロータリークラブのロータリアンがいらっしゃいまして、楽団の用事でお邪魔しました時に、ロータリーでGSEというプログラムがあるので、応募してはとのお話をいただきまして、是非、お願いしますということで、試験を受け選抜いただき、派遣していただいた、というのがロータリーとの出会いでございます。

GSEプログラムというのは、グループ・スタディー・エクスチェンジの約語で、グループ職業研修、職業交換留学という訳になるかと思えます。就業している社会人4~5名とロータリアン1名でグループを結成いたしまして、約1か月間、外国で職業研修と親睦を行うプログラムでございます。期間中は、基本的にはロータリアンを中心としたホストファミリーにホームステイいたします。



私は、2006-7年度のGSEのメンバーとして、RI第6580地区(米国インディアナ州南部)に派遣され

ました。そちらでの研修について、先ず、簡単にご報告させていただければと思います。2007年3月に第6580地区に入りました。写真手前左側がリーダーの村上まさこ様で、それぞれメンバーの職業は、スポーツ用品店勤務、自動車部品製造業、介護福祉のケアマネージャーと多様でございます。派遣先はといいますと、五大湖の南側にありますインディアナ州で内陸部に位置しております。こちらの写真は、成田を飛び立って最初に降り立った州都のインディアナポリスでございます。その後、グリーンズウッドという町を拠点に、数か所の町で職業研修をしてみました。それぞれ行った先々でウエルカムパーティーを開いていただきまして、我々は日本の代表として行っている訳でございますので、そこで新聞紙をいただいて折り紙の要領でカブトを作って、皆さんに被っていただくなど、日本文化を紹介することもやってみました。

こちらはオハイオ川対岸のルイビルでございます。州名でいいますとケンタッキー州でございます。この写真は、野球の好きな方はご存知かもしれませんがスラッガーミュージアムでして、世界の大打者のバットを展示しております。日本だと、王貞治さんのバットが展示されておりました。アメリカという国は広大ですが、移動はほとんどが自動車でしたが、自動車も大きくてトイレ付のバスのようなもので移動する生活を送っておりました。ここは、石炭がとれる町でして、日本ですとトンネルを掘って採掘しますが、こちらは、上部の土砂をそっくり取り除いて、露天掘りでこちらの写真の大型機械で掘削するという方法です。

3月35日に日本を出立し、4月23日までの約1か月間の研修期間でございましたが、その間、実際にどのような研修を行ってきたかと申しますと、この写真はトヨタ・モーター・マニュファクチャ・インディアナといまして、アメリカトヨタの主力工場です。トヨタといいますが、組立工場だけでなく部品工場とか物流といった部門もありまして、工場団地になっています。トランプ大統領がトヨタの話をする時に写っているのがここでございます。こちらは工場の内部ですが、当時の米国内生産率は、シエラという車で90%、小型のピックアップトラックの部品調達率は70%ということで、ほぼ、米国産の部品で賄われているということです。純粋な米国産に限りなく近づき、貿易摩擦の解消に役立つということでございます。

インディアナ州は自動車産業で栄える州でございます。いわゆるアメ車というアメリカ産の車は売れなくて困っております。デトロイトも今はひどい状態です。この時期に日本の主要なメーカーのトヨタ、日産、ホンダなどがそれぞれ進出して、現地雇用が増えている時期でございました。

様々などろを見せていただきましたが、こちらは三菱関連の会社です。三菱重工のアメリカの拠点ですが、自動車のドライブシャフトをメインに作って

いる会社です。こちらはトヨタのフォークリフトを作っている会社です。こちらは、ジーコンという精密部品を作っているメーカーです。その他、大型工作機械部品を作っている会社とか、部品と言っても大量生産ではなく、1点ものですね。こちらは、戦闘機に使われる精密部品を作っている会社です。こちらは、ソニーの関連会社で映像関連のコンテンツを扱っている会社です。

コンピューターに関しては、アメリカは技術のメッカですので、特に問題なくビシビシ使えました。10年前ですので、まだインターネットが普及し始めた時期でしたので、日本のノートパソコンを持っていきましたが、何の問題もなく使えました。当時もすでにウィンドウズというOSが使われておりまして、問題なく使えました。ただ、ホームステイ先は高齢の方が多かったので、各お宅でネットの使用をお願いするんですが、よくわからないことが多く、私が探して繋いだということがございました。



つづきまして、こちらは第6580地区の地区大会の様子です。地区大会では日本チームとしてプレゼンテーションを行ってきました。日本文化を紹介するというので、これはお土産として持っていった「鯉のぼり」です。これを会場で披露しました。

このようなことで1か月間をアメリカで過ごさせていただきました。特に、エバンスビルという町では良くしていただきまして、趣味で吹奏楽をやってますとよく言ってましたら、是非、アメリカで演奏会をやってみないかとの話をいただきまして、2009年に栃木市民吹奏楽団として演奏活動を行ってまいりました。栃木市とエバンスビルの姉妹都市提携10周年記念事業の主たるイベントとして派遣していただきました。その時、GSEでお世話になったファミリーにも再開することができまして、非常になつかしく会話をすることができました。演奏会当日には、テレビで告知していただいたりしました。以上が、GSE後の交流のお話です。

続きまして、ロータリー財団学友会の話をしていただきます。GSE及び国際親善奨学生OBまたはOGで構成されている組織でありまして、国際親善奨学生OB,OG150名。GSEOG、OB100名。合計250名の組織でございます。ロータリーが縁で交流することができた様々な業界のメンバーなので、末永く交流して機会があればロータリークラブへお返しが出来ればと思い日々活動しております。現在の主な活動といたしましては、年1回総会を開催し、

毎回、ガバナーにもご出席いただいております。内容は、GSEあるいは国際親善奨学生の帰国報告会を中心に行っております。その中には、芸術を専攻した者もおりますので、歌あるいは楽器演奏が披露されることもあります。その他主な活動のひとつとして、「ステップアップファザー」という会報誌を発行しております。内容は、毎年の活動内容、帰国メンバーの報告といった内容をまとめまして、毎年1回発行しております。

その他、学友会といたしましては、第2820地区(茨城県)との交流。もともと茨城と栃木は以前はひとつでしたので、その時から関係が深く、茨城の学友会には親しくしていただいております。交流会という形で、毎年、ホストは交代しながら、それぞれの地区を紹介して回っております。この写真は2013年に北茨城へ行った時のものです。北茨城も津波の被害が大きくて、2年経ってはいましたが、まだその爪跡が残っておりました。こちらは、津波で破壊されましたが再建された岡倉天心の六角堂です。これは2016年に行った日光での交流会の様子です。折角ですのでガイドをお願いしまして、日光の奥深いところを説明をいただきながら堪能してまいりました。

近年、学友会を中心としたロータリークラブを設立しようというお話をいただいております。その打合せをおこなってございましたところ、新ロータリークラブ設立のお話がございます。「宇都宮さつきロータリークラブ」が設立されるので、そこに合流しませんかとの話をいただきまして、3名の学友会員が参加いたしました。チャーターメンバーとして参加することができました。その関係で宇都宮さつきロータリークラブ様とは親しくお付き合いをさせていただいております。今年の学友会総会は、財団100周年ということもございまして、宇都宮さつきロータリークラブさんと合同で、例会と総会を同時にやらせていただいております。以上が学友会の活動説明になります。

もう10年前になりますが、1か月間海外で過ごさせていただいたことは、本当に代え難い経験になっております。このご恩を是非お返しできればと思って活動しております。国際親善奨学生は一芸に秀でていまして、音楽とか国際交流とか専門知識が深いメンバーもおりますので、お声をかけていただければ卓話等にメンバーを紹介することもできますので、是非、お声かけいただければと思っております。今後とも学友会をよろしくお願い申し上げます。本日は有難うございました。



## ロータリー財団の歴史を知ろう

- ナレーター ちぎぎテレビ報道部  
アナウンサー 田崎 好美 様



ロータリー財団は、クラブや地区による地元での社会奉仕プロジェクトや、海外での国際奉仕プロジェクトといったロータリーの奉仕活動を資金面で支えています。また、全世界規模で行われているポリオ撲滅活動にも多額の資金を授与しています。財団の資金は、ロータリアンをはじめとする支援者からの寄付によって支えられています。財団の資金を利用した奉仕活動で中心的な役割を果たしているのも、ロータリアンです。

2016-17年度には、財団100周年を祝う祝賀行事が世界各地で行われます。最初の祝賀行事は、韓国での2016年ロータリー国際大会で行われ、フィナーレを飾る行事は米国アトランタでの2017年ロータリー国際大会で行われます。この年度中、すべてのロータリアンに、何らかのかたちで100周年を祝う活動や行事を実施いただきたいと思います。地元で100周年記念行事を開催し、財団の100年の活動を紹介してください。行事のほかにも、グローバル補助金または地区補助金を利用したプロジェクトを実施して、財団の100年の歴史に花を添えることもできるでしょう。また、100周年を記念して年次基金、恒久基金、ポリオプラス基金、ロータリー平和センターに寄付するのもよいでしょう。1917年のアトランタ大会で、当時のアーチ・クランプ会長のひらめきによってロータリー財団の種が播かれました。ロータリー財団は、最初の26ドル50セントの寄付から、資産10億ドルの世界最大規模の財団に成長し、今日、何百万人もの生活に変化をもたらしています。



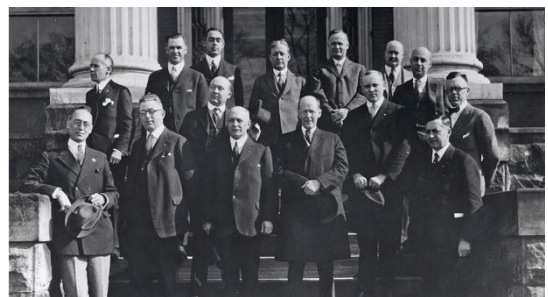
アーチ・クランプは、ロータリーの恒久的な基金というビジョンの実現に尽力したことから、「財団の父」と呼ばれています。1913年に米国オハイオ州のクリーブランド・ロータリークラブ会長に就任したクランプは、将来によりことを続けていくための準備金をクラブで積み立

ることを提案し、ロータリー会長となった1916-17年度に、さらに多くのロータリー会員にこのアイデアを紹介しました。1917年のアトランタ大会で、クランプは次のように述べています。「諸々の社会奉仕を今まで通りに実行していくには、慈善・教育・そのほかの社会奉仕の分野において世界でよいことをするための基金を作るのが、極めて適切であると思われる」後にこのビジョンを土台として誕生したのがロータリー財団です。彼の「世界でよいことをする」という言葉が、財団の標語となりました。しかし、彼のビジョンが完全に実現されるまでは多くの歳月を要しました。

1917年のアトランタ大会に集まった代議員は、クランプのビジョンに賛同し、基金を設立するべくロータリー定款を改正することを決めました。この基金は、「クラブ、個人、地位のある人、その他の人びとから寄せられる寄付によって」作られ、基金の元金は使用されず、基金から生じる利息のみがロータリーの目標を支えるための資金として使用されました。また、代議員の決定によって、ロータリーの理事会は、基金の管理委員会となりました。財団はこの基金を土台として始まったものですが、1980年代にできた今日の恒久基金とは異なるものでした。

同じく1917年、アトランタ大会でのクランプの提案に応えるかたちで、米国ミズーリ州のカンザスシティ・ロータリークラブから、最初の寄付26ドル50セントが基金に寄せられました。しかし、その後ほぼ10年間、この基金が大々的に知られることはなく、寄せられた寄付もごくわずかでした。

1927年、ロータリーのリーダーは基金への関心を高め、その翌年、ロータリー大会の代議員によって、この基金はロータリー財団という名称に正式に変更されました。また、代議員は財団の領域を拡張し、5名の管理委員を任命することに同意しました。ロータリー会長は、アーチ・クランプを管理委員長とする最初の管理委員を任命しました。クランプは7年間、財団についてロータリアンを教育し、寄付を奨励しました。クランプは、財団の必要性を強く信じていましたが、財団が任意の寄付によって築かれるべきだと強調しました。課金や税金に頼ることは、組織規定に背くものでもありました。今日、財団には15名の管理委員がおり、RI会長エレクトによって指名され、RI理事によって選出される委員は、4年間の任期を務めます。また、毎年、管理委員長が選ばれます。



1930年、財団は初の補助金を国際身体障害児協会(後のイースター・シールズ)に授与しました。この身体障害児協会は、ロータリアンのエドガー・アレンが1919年に創設したもので、ロータリー創設者のポール・ハリスは同協会の理事を務めていました。この写真は1922年に同協会の創立会員を撮影したものです。前列の左から3番目にいるのがエドガー・アレンで、その右側にいるのがポール・ハリスです。

財団は、その初期において、当時、ロータリーの目的の第6項目であった「国際理解、親善、平和を推進する」ための方法を模索していました。1930年代初め、財団は、高校生を対象に、平和関連の事柄を主題とする小論文コンテストを実施し、その受賞者を1931年と1933年のロータリー大会で表彰しました。国際理解研究会も、初期の活動の一つでした。財団は、著名なゲストを招いて世界の問題について話し合うプログラムを実施することをクラブに奨励し、クラブがゲストの招待にかかる費用を支払えない場合は、財団がその資金を提供しました。この写真に写っている若者は、ミシガン州で開催された国際理解研究会に出席した高校生たちです。



1947年、財団は「高等教育のためのロータリー財団フェロウシップ」というプログラムを開始しました。写真は「ザ・ロータリアン」誌に掲載されたもので、1947-48年度に奨学金を受けた最初の奨学生グループです。奨学金の受領条件は、その後の70年間に更新を重ね、その名称も、「ポール・ハリス・フェロウシップ」「国際親善奨学金」「ロータリー奨学金」と変更されました。しかし、将来有望な学生に海外留学の機会を与えるという概念は当初から変わっていません。ロータリーの奨学生には後に著名人となる多くの人があり、日本人では宇宙飛行士の山崎直子さんや、元国連難民高等弁務官の緒方貞子さんなどがおられます。

今日も、多くの学生が、財団のグローバル補助金や地区補助金を受領し、世界各地の大学や大学院、また世界6カ所にあるロータリー平和センターで学んでいます。過去、そして現在の財団においても、ロータリー奨学生またロータリー平和フェローは、財団の人道的活動と平和構築の使命

を支える大きな力として、幅広い知識とスキルを学んでいます。

財団は、職業スキルの向上にも力を入れてきました。1960年代、のちに「職業研修奨学金」と改名される「技術研修のための補助金」が導入されました。これは、海外を訪れ、職業スキルを学んで母国で生かすための機会を若い成人に与えることを目的としました。1964年に、財団管理委員会と理事会は、研究グループ交換(GSE)プログラムを導入することに同意しました。このプログラムは、1950年代にニュージーランドで始まった二国間の交換プログラムをモデルとしたもので、1964-65年度に34のGSEチームが、それぞれの職業や文化、また地区を代表する親善大使として、他国に派遣されました。チームメンバーは、自分の職業が他国でどのように実践されているかを学び、また自らの実践方法を相手と共有することを目的としていました。写真は、ジュネーブ(スイス)近郊にある欧州原子核研究機構を訪れたオーストラリアからのGSEチームです。今日の財団では、職業の専門家が海外を訪問し、職業スキル研修を行ったり、新しいスキルを学んだりすることを目的とした「職業研修チーム(VTT)」プログラムが実施されています。

1963-64年度に、当時のRI会長だったカール・ミラーは、異なる文化や信念をもつ人びとを結び付けることで、冷戦による緊張状態を緩和することを重要視しました。そして1964年、管理委員会は、のちに「マッチング・グラント」と改名される「特別補助金」を開始することを承認しました。この補助金は、国際理解を向上するためのプロジェクトを実施するための資金を、クラブと地区に提供することを目的としました。しばしば2カ国の会員の協力による人道的项目が実施され、このような協力は最終的にプログラムの要件となりました。このプログラムを通じて、合計5億ドル以上に及ぶ37,000件のマッチング・グラント・プロジェクトが、200を超える国や地域で実現され、識字向上のためのスキル研修やきれいな水の提供など、あらゆるニーズに応える活動が実施されました。

一例として、韓国とモンゴルのロータリアンは、マッチング・グラントを利用し、ゴビ砂漠で複数年度に渡る緑化プロジェクトを実施しました。

1970年代後半、ロータリーのリーダーは、1980年の国際ロータリー75周年を記念する大規模な国際プロジェクトを発展させるための方法を模索していました。そして1978年、財団は保健、飢餓追放および人間性尊重(3-H)プログラムを開始。1979年には、複数年にわたってフィリピンの子どもたち600万人にポリオ予防接種を提供するための最初の補助金760,000ドルの活動を開始しました。その後30年間、3-Hプログラムを通じて、眼科治療、義足の提供、移動式クリニックを含む保健分野の幅広いプロジェクトが実施されました。

3-H補助金では、識字率の向上にも力が注がれました。オーストラリアのロータリアン、リチャード・



ウォーカーは、「集中言語能力助長プログラム (CLE)」と呼ばれる教授法を用いて、タイの遠隔地域で基本的な読み書きを教えました。このプログラムの成功を受け、同様のプログラムがブラジル(写真左)と南アフリカ(写真右)を含む多くの国で実施されました。

さらに、3-H補助金では、保健・教育分野の活動に加えて、

- ルーマニアの孤児院や病院への食料・ミルクの提供
  - ウガンダの女性たちの経済活動を支えるための裁縫スキル研修
  - インド、ボリビア、その他多くの国や地域での井戸の採掘と衛生システムの改善
- といった様々なプロジェクトが実施されました。



財団は1999年、世界の著名大学との協力の下、「国際問題研究のためのロータリーセンター」を開設。その後の2002年秋に、平和フェローの第1期生が各平和センターで研究をスタートしました。世界6カ所にある平和センターは、研究と実地研修を通じて、平和構築と紛争予防／紛争解決におけるリーダーを育成することを目的としており、毎年最高100名の平和フェローが新たに参加しています。平和センターの卒業生は世界各地で活躍しており、スーダン難民が新たな生活を始めるための支援、社会的に恵まれない境遇にあるインド人女性のための雇用支援、その他の問題のある地域での社会再建活動など、多岐に渡ります。ハイチで大地震が発生した2010年には、元平和フェローのルーザ・ダウさん(写真左)が、ハビタット・フォー・ヒューマニティと協力し、住むところを失った人びとが家屋を得ることができるよう支援を行いました。

21世紀に入り、財団は世界各地で大きな変化をもたらす活動を実施していました。しかし同時に、長年の歳月を通じて枝分かれしてきたさまざまな財団プログラムを、どのように管理していくかという課題にも直面しました。ロータリーは2004年、プログラムの拡張に伴う運営費の増加に対応するための方策を検討し、のちに「未来の夢」と呼ばれる新しい補助金モデルを考案しました。地区補助金、グローバル補助金、パッケージ・グラントの3種類のみが提供されるこの補助金モデルは、2010年から2013年に試験的に導入され、100地区が参加しました。そして2013年、この新しい補助金モデルが

全世界で導入されました。これに伴い、マッチング・グラント、国際親善奨学金、研究グループ交換 (GSE) が廃止されましたが、その要素はその後受け継がれています。また、その後、パッケージ・グラントは継続しないことが決定されました。

地区補助金は、地元や海外の地域社会のニーズに取り組むための、比較的規模の小さい、短期的な活動を支援します。各地区は、この補助金を配分するプロジェクトを独自に選びます。地区補助金は、地区やクラブの幅広いプロジェクトや活動に活用できます。

- 人道的プロジェクト(奉仕活動を行うための現地への渡航や災害復興活動など)
- 奨学金(教育機関のレベルや場所、支給期間、専攻分野の制約なし)
- 職業研修チームの派遣

グローバル補助金は、ロータリーの6つの重点分野に該当し、持続可能かつ測定可能な成果をもたらす大規模な国際的活動を支援します。補助金プロジェクトのスポンサー(提唱者)は、国際的なパートナーシップを組み、各地の地域社会のニーズに取り組みます。グローバル補助金は、次のような活動に使用できます。

- 人道的プロジェクト
- 奨学金: 大学院レベルの留学
- 職業研修チーム(VTT)



例として、写真右のメキシコでは、車椅子を修理するための移動式クリニックがグローバル補助金によって実現しました。クリニックのスタッフも身障者で、車椅子のデザインや組み立てのほか、多様なニーズに応える特注の車椅子の製作に取り組んでいます。このプロジェクトでは、各地のロータリークラブが調整役となり、認可の取得や電気の配線、スタッフの住居管理、マーケティングを担当しています。続いて、写真左のブルキナファソでは、度重なる干ばつの問題に直面していた地域社会で、井戸の設置プロジェクトが行われました。これにより、女性や子どもたちは、水を得るために毎日何kmも歩く必要がなくなりました。写真では、多くの住民が、きれいな水が得られるようになることへの希望を胸に、井戸の採掘工事を見守っています。

ホンジュラスでは、女性の経済的自立をサポートするためのグローバル補助金プロジェクトが実施されました。写真に写っているラミージャ・ドミンゲスさんは、女性12名による織物事業の協同組合の



リーダーをしています。これらの女性たちは、ロータリーと、プロジェクトパートナーであるアデランテ財団からのマイクロクレジット(小口融資)を受けてビジネスを成功させることができました。

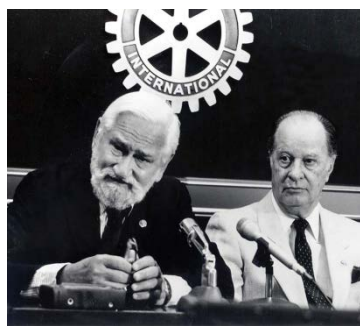
ポリオ撲滅をめざすロータリーの闘いは、フィリピンの子ども600万人にポリオ予防接種を提供するための複数年プロジェクトとともに、1979年に開始しました。1979-80年度RI会長であったジェームス・ボーマーは、フィリピン政府との同意書に署名し、マニラの子どもたちへの経口ポリオワクチン管理を通じたプロジェクトが開始されました。ボーマーは、1993年のインタビューで、フィリピンでの予防接種活動に参加した際、幼い少年に自分のズボンを引っ張られ、「ありがとう。ロータリー、ありがとう」と言われたときのことを、感動とともに振り返りました。

フィリピンでのポリオ予防接種活動が最初の一步となり、ポリオ撲滅活動は世界的な活動へと発展していきます。1980年のロータリー規定審議会は、RI理事会から提出された「予防接種によってポリオを撲滅する」という立法案を承認し、これによりロータリーは、「組織からの押し付けプログラム」を禁じる1923年の決定に反することなく、予防接種を推進することが可能になりました。RI理事会は1984年、のちに今日のポリオプラス・プログラムに発展する、一連の決定を行い、ポリオ撲滅活動を支えるための基金を設置しました。当初、このプログラムは、2005年までに世界中の子どもたちに予防接種を提供することを目標に、「ポリオ2005」と呼ばれていました。ロータリーのリーダーは、1985年初旬にこの大胆な計画を発表し、同年後期にポリオプラスというプログラム名に変更しました。この「プラス」とは主に、ポリオワクチン以外のワクチンの提供も行うことを意味し、今日ではさらに、ポリオ撲滅活動で導入されたインフラ、ファンドレイジング、アドボカシーの活動体制が、ほかの感染症との闘いでも応用できることを意味しています。

1980年代半ばに、ロータリーは1億2000万ドルを集めることを目的とした3年間の募金キャンペーンを開始しました。このキャンペーンでは、ポリオ撲滅の重要性と、撲滅による世界への影響について、クラブの理解を向上させることも焦点としていました。また、ロータリーのリーダーは、非政府組織や政府高官とも面会し、目標を達成するための支援を要請しました。その結果、キャンペーンは目標額

の2倍を上回る2億4700万ドルを集め、ロータリー史に残る成功を収めることができました。この達成は、米国ペンシルバニア州フィラデルフィアで開催された1988年のロータリー大会でも盛大に祝われました。

ポリオ撲滅活動におけるロータリーの初期の活動を土台として、1988年、ロータリー、世界保健機関(WHO)、米国疾病対策センター(CDC)、ユニセフを初期メンバーとする、世界ポリオ撲滅推進活動(GPEI)が開始されました。当時は、毎年350,000人の子どもたちがポリオに感染していましたが、今日、その数は99.9%減少し、野生型ポリオウイルスが常在する国は、アフガニスタンとパキスタンの2カ国のみとなりました。GPEIの開始以来、ビル&メリンダ・ゲイツ財団や各国政府なども撲滅活動に加わりました。ロータリーは、これまでに15億ドル以上の資金を投じ、現在も活動のための資金調達に取り組んでいます。また、世界各国の政府へのアドボカシー(支援の呼びかけ)にも力を入れ、90億ドル以上の政府援助を引き出すことに成功しています。



ポリオ撲滅活動における前進をもたらした大きな要因は、大規模な予防接種活動です。これは、経口ポリオワクチンを開発したアルバート・セービン博士(写真左)と、

ともにロータリアンで医師でもあるカルロス・カンセコ(同右)とジョン・セーバーによって唱導された方法です。略してNIDと呼ばれる全国一斉予防接種活動では、通常、国中に何千カ所もの予防接種ポイントが設置され、保健員とボランティアによって、1日のあいだに何百万人もの子どもにワクチンが投与されます。また、5歳未満の子どもに漏れなく予防接種を行うため、NID当日とその前には、ボランティアがNIDを告知するポスターやちらしを使用し、ときには拡声器を使って参加を呼びかけることもあります。口からワクチンを投与された子どもの指には、予防接種済みであることを判別するためのインクが塗られ、NID後の数日間で保健員が家屋を戸別訪問し、指に印のない子どもにワクチン提供を行います。さらに、5歳未満児への予防接種を徹底させるため、このような一連の活動が数カ月ごとに繰り返し行われます。

NIDを成功させるには、ボランティアと保健員による事前の社会動員が鍵となります。そこで財団は1995年、社会動員を支援するためにポリオプラス・パートナー・プログラムを発足しました。このプログラムでは、国や地域のポリオプラス委員会が、ワクチン運搬用ボックス、バナー、パンフレット、保健

健員・ボランティア用のTシャツ、ベスト、帽子など、必要とされる物資を確認します。その後、国別委員長が物資リストを提出することで、費用が支給されます。1995年にインドで行われたNIDでは、ベスト数百着のニーズが委員会によって確認され、日本のロータリアンから、ベストだけでなく、帽子、ポスター、バナー、運搬用ボックスを購入するための十分な資金が提供されました。一方、インドのロータリアンは、来るNIDを住民に知らせ、ワクチンを管理するためのボランティア10万人を社会動員しました。

財団創設後の30年間において、財団の資産は少しずつ成長するのみでした。実際、1917年から1947-48年度の末にかけて、財団が受領した寄付は合計でもわずか200万ドルほどでした。今日、財団の資産は10億ドル以上に成長しています。では、この著しい増加は、どのようにして実現されたのでしょうか。

寄付額は、ポール・ハリスが病との闘いの末に没した1947年に増加し始めました。ロータリーは、彼を追悼するのであれば、財団に寄付すべきだとのハリスの言葉にちなみ、ハリス死去の知らせが広がったあとにロータリー本部に寄せられた多額の寄付を管理するための特別基金を設置しました。ハリス逝去後の18カ月間に財団に寄せられた追悼寄付は、130万ドルに達しました。その後も年度を重ねるごとに額は増加し、1965年には寄付が初めて1年間で100万ドルを超えました。1978年に東京で開催された国際大会で、ロータリーは2年間に渡る75周年基金の創設を発表し、720万ドル以上の寄付が寄せられました。財団は2004年、財団補助金を支える年次基金への寄付を促進するため、「Every Rotarian, Every Year」キャンペーンを開始し、2014-15年度には、過去最高となる1億2300万ドルの寄付が年次基金に寄せられました。

財団が世界でよいことを続けていくには、奉仕活動のほか、寄付者からの支援が欠かせません。そのため財団は、寄付者への感謝を示す一つの方法として、責任をもって賢明に資金を使用することに力を入れています。財団では管理委員会によって慎重な資金管理が行われており、ボランティアと専門家のネットワークを駆使して、財団補助金が適切かつ倫理的な方法で使用されていることを厳しく確認しています。このような財団の資金管理体制は、慈善団体の格付け団体によっても高く評価されており、寄付が効果的な方法で使用されていることが証明されています。

財団の寄付者に対する最初の認証は、ポール・ハリス・フェローです。1,000ドル以上を寄付された方々を認証するもので、1957年に始まりました。寄付者は、さらに追加で1,000ドルを寄付するごとに、「マルチプル・ポール・ハリス・フェロー」として認証されます。また、ほかの人の名義で寄付し、ポール・ハリス・フェローの認証を贈ることもできます。ポール・ハリス・フェローの数は、2006年に100万人を超え、現在150万人に達しています。ポール・ハリス・フェローとなった方々には、ポール・ハリス・

ソサエティ(PHS)に入会される方も大勢います。PHSは、年次基金、ポリオプラス、財団が承認したグローバル補助金に毎年1,000ドルを寄付する会員や財団支援者にご入会いただけます。この認証プログラムは、以前は地区ごとに管理されていましたが、2013年、PHSは財団の正式プログラムとなりました。1980年代、財団は累積寄付の合計が10,000ドルに達した方を対象とする、メジャードナーの認証を導入しました。また、1984-85年度には、遺言またはそのほかの遺産計画に財団恒久基金を受益者として指定した方、または恒久基金に1,000ドル以上を現金で寄付された方を対象とする、ベネファクターの認証を始めました。続いて1999年、管理委員会は、遺産計画を通じて1万ドル以上を寄付した方を認証する遺贈友の会を開始しました。

やがて、極めて高額な寄付をされる方が増えるにつれ、財団は2004年、累積寄付の合計が250,000ドルに達した個人・ご夫妻・組織を称える、アーチ・クランプ・ソサエティ(AKS)の認証を導入しました。AKS入会者は、米国イリノイ州エバンストンにある国際ロータリー本部にて行われるソサエティの入会式に招待され、本部にある特別ギャラリー(写真)に肖像写真が飾られます。2005年からは、AKS会員を対象とした晩餐会が国際大会中に開催されています。

26ドル50セントの最初の寄付が行われて以来、財団の資産は約10億ドルにまで成長し、これまでに30億ドルもの資金が、世界中の何百万人もの生活に変化をもたらすプログラムや奉仕プロジェクトに投じられてきました。また、財団は次のような影響をもたらしてきました。

- 25億人の子どもにポリオ予防接種を行い、野生ポリオウイルスによる発症数は99.9%減少
- 900人以上のフェローが平和センターで研究を行い、紛争解決、戦後処理、平和推進のスキルを習得
- 何十万人もの人びとに、きれいな水へのアクセス、医療と保健、教育の機会を提供

私たちは、財団を通じて奉仕の喜びを知ることができます。財団には、会員だけでなく、学友や友人も、地域社会のためによいことをし、人びとの生活に重要な変化をもたらせる多くの機会があります。世界に変化をもたらす団体としてのロータリーの定評も、財団の堅実な管理運営体制があるからです。

変化をもたらす方法として、次のような方法をぜひご検討ください。

- 海外のパートナークラブ(姉妹クラブ)と協力して、重点分野に該当するグローバル補助金プロジェクトを実施
- クラブまたは地区が実施する補助金プロジェクトを支援、または積極的に参加
- これからもずっと世界でよいことを続けていけるよう財団に寄付

ロータリーを通じて、これからも変化をもたらしていきましょう。



## お礼の言葉

### ● 次期ガバナー補佐紹介 高木慶一 第1グループガバナー補佐



● お礼の言葉  
ロータリー財団学友会の伊東崇会長様にはアメリカでのGSE派遣の貴重な経験をプロジェクトを使っての講演を頂きありがとうございました。

とちぎテレビのアナ

ンサー田崎好美様にはボリュームのある「ロータリー財団100年の歴史を知ろう」のパワーポイントのご紹介を頂きありがとうございました。快いアナウンスで心地良く視聴できたと思います、ありがとうございました。

### ● 次期ガバナー補佐紹介

次期ガバナーを紹介いたします。西那須野ロータリークラブの佐藤正一さんです。

1991～92年度郡司昌佳会長の時幹事、2001～02年度会長に就任され、ロータリー歴34年の大ベテランでいらっしゃいます。

佐藤正一さんご挨拶をお願いします。

### ● 次期ガバナー補佐挨拶 佐藤正一 第1グループ 次期ガバナー補佐



次期ガバナー太城敏之年度の第1グループガバナー補佐を仰せつかりました、西那須野ロータリークラブの佐藤正一と申します。どうぞ宜しくお願い申し上げます。自己紹介をさせていただきます。生まれは昭和19年5月で現在73歳です。ロータリーの入会は1983年1月11日、在籍34年になります、2001年～2002年クラブ会長、2003年～2004年地区青少年交換委員会を経験させて頂きました。

職業分類は燃料店です。昨年10月から毎月ガバナー補佐研修会に出席して研修を積んでおります。次年度RI会長テーマは「ロータリー変化をもたらす」です。次年度太城敏之ガバナーは「チャレンジ(挑戦)&イノベーション(変革)」を掲げました。「2020・2000作戦」ロータリー・リーダーシップ研究会「RLI」を推進、今年8月に開催される「第6回

全国インターアクト研究会」の成功に向け地区一丸となってサポートする予定です、いずれにしましても補佐の役目はクラブと地区の情報を繋ぐ役割と考えております、各クラブ会員皆様のご協力と支援を頂き円滑にしたいと思っています、よろしくお願いして挨拶とさせていただきます。

### ● 次期IM開催クラブ挨拶 小出文雄 西那須野RC次期会長



2017-18年度 西那須野ロータリークラブ会長を仰せつかりました小出文雄です。次年度は西那須野ロータリークラブがIMを執り行います。多くの皆様のご出席をお願いします。

会員一同お待ちしております。よろしくお願い致します。



## 閉会

### ● 閉会挨拶 稲垣政一 IM実行委員会副委員長

実行副委員長の稲垣で御座います。

本日はお忙しい中、インターシティミーティングに参加頂き誠にありがとうございました。皆様のご協力のもと盛大に催すことが出来ました。心より感謝いたします

今後とも黒磯ロータリークラブの活動に関し、ご指導ご鞭撻のほど宜しくお願い致します。

では、以上をもちまして国際ロータリー第2550地区第1グループインターシティミーティングを閉会と致します。

有難うございました。

### ● 点鐘 高木慶一 第1グループガバナー補佐



## 懇親会

第2部の懇親会では「100周年を祝う」財団に寄付しようとFoundation Boxを廻しました。56,500円と20パーツが集まりました。地区財団委員会に送金いたしました。また親睦会の模様は付属の写真集をご覧ください。